永遠の雪光

YOU☆YOU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠の雪光

【Ｎコード】
Ｎ０２０１Ａ

【作者名】
ＹＯＵ☆ＹＯＵ

【あらすじ】
十二月、二十四日。帝丹小学校の終業式。その日は、世間一般的に言う、「クリスマス・イヴ」。だが、その日を良しと思う者ばかりではなかった。灰原哀。彼女の言動がおかしいことに、光彦は気付く。コナンは結局気になって、哀の行動を探ることになるのだが

―――

（前書き）

この小説は、コナン×哀のカップリング気味な小説です。
ですが一応、純愛ですので・・・勘弁してやってください^^;

――お前が忘れない限り、お姉さんはいつまでも側にいるんだ・・・。永遠に、心の中で。――――

キーンコーンカーンコーン・・・キーンコーン・・・

十二月二十四日。帝丹小学校の終了式後のことであった。

待ちに待った冬休み。帝丹小学生たちは、授業終了のチャイムがなると、一目散に教室を出て行った。

歩美はいつもの様に、哀と一緒に帰ろうとしていた。が、その哀の姿が見えない。

「哀ちゃん・・・どこいっちゃったんだろう。」

と、歩美が探している最中に、哀はクラスに戻ってきた。

「あっ！あーいちゃん！一緒に帰ろ！」

哀の姿を見るなり、一緒に帰ろうと誘う歩美。だが・・・

「ごめん・・・。今日は、寄る所があるから・・・。」

と、哀は申し出を断ったのである。

哀が申し出を断るなんて滅多にない。歩美は何かあったのではないかと、哀に聞き返した。

「どうしたの？何かあったの？悩み事？何でも言ってよ、私たち、友達でしょ？」

「・・・何でもないの。大丈夫、心配ないわ。」

「でも・・・。」

「歩美ちゃーん！一緒に帰ろっ！！」

歩美は何か言いたそうだったが、他の友達に帰りを誘われ、

「あっ、じゃあ哀ちゃん、明日帰ろうね。」

哀に一言残し、手を振って教室を去って行ったのである。

そんな二人の一部始終を見ている者がいた。コナンと、光彦である。

「コナン君、今日の灰原さん、おかしくありませんか？」
光彦は哀の行動、言動から彼女がいつもと違うことに気付く。が、コナンは。
「そうか？オレにはいつもと変わらんねー気がするんだけどな。」
そんなことないですよ！、と声を張り上げる光彦。
「今日は天気予報で雨、もしくは雪だって言っているのに、傘を持ってきてないんですよ！おまけに授業中は、ずっと窓の外ばかり眺めていましたし。」
「・・・光彦、お前・・・よく見てるな。隣のオレでも全然気付かなかったけど・・・。」
「いっ・・・いえ！ぼ・・・ボクはそんなつもりで言ったんじゃ・・・。」
（・・・最近のガキの恋ってのはませてるもんだぜ、ほんと。）
そんなことを思いつつ、コナンはバッグを背負い、教室を出て行こうとしていた。
「とにかく俺は帰るぞ。・・・雲行きも怪しいしな。」

雨が降り出してきた。大粒、小粒と。
それでも足は進む。帰路へ向かって。
雨は傘に弾かれ、ぽつぽつと言う音を作り出す。
コナンは雨の中を一人で歩きながら、光彦の先程の言葉を思い返そうとしていた。
（「今日の灰原さん、おかしくありませんか？」）
「確かに、今日の灰原は割と素っ気無かったな。話しかけても生返事気味だったし・・・。」
ふいに、コナンの足が止まった。そして、足は先程と違う方向へ歩んでいった。
「ったく・・・。心配かけやがって。」
コナンは結局哀のことが気になり、博士宅に向かうのである。

「博士ー！いるかーい！？」
「・・・おお、新一君。丁度良かった。ちょっと待っとれ。」
博士は玄関に顔を一旦出すと、また家に戻って言った。
「これじゃ、これ。」
博士は手にＣＤを持って出てきた。
「何だよ、これ。」
「ほれ、この前言っておったゲームじゃよ。Ｖｅｒ２が出来たんで、新一君に今・・・。」
「それはパス。また今度な。」
「そうか・・・。残念じゃのう。自信作なのに。」
「・・・それより博士、灰原は？」
「哀君？まだ帰ってきとらんよ。」
「そっか。・・・オレより先に教室を出たのに・・・。センキューな、博士。」
クルッと博士に背を向け、コナンはまた雨の中へ飛び込もうとしていた。が、
「哀君に何かあったのか？・・・まさか、また黒づくめの男たちに・・・。」
博士が心配をしているようだったので、コナンは一部始終を博士に言うことを決めた。

「・・・フム。哀君の様子がおかしいと・・・。」
「ああ。授業中、ずっと遠くを見ていたらしいぜ。」
「確かに、朝から哀君はおかしかった。食事もろくに取らんし、傘を持っていくように言っても、『いらない』じゃからな。」
「何か今日は灰原にとって特別な日なのかもしれねえ。博士、心当たりはないか？」
うーん、と考え込む博士。が、結局何の心当たりもなかった。
が、パッと表情を輝かせると、コナンに言った。
「そうじゃ！昨日のことからじゃが、哀君が、夢にうなされている

らしいんじゃ。」
「夢に？けどよ、今日のこととはあんまり関係ないじゃねーか。」
所が大アリなんじゃ、と博士も言う。
「哀君は夜通し夢にうなされているらしい。それでな、ワシも気になって昨日の夜、寝ずに起きてたんじゃ。」
「寝ずに起きてただぁ？博士、寝ないとハゲるぜ。」
「いいから聞かんかい！・・・哀君は、夢の中でしきりに今日の日付をうなって、お姉ちゃん、お姉ちゃんと言っておった。」
「今日・・・そしてお姉ちゃんか。・・・あいつ何考えてるんだろうな。全然わかんねえよ。」
と、博士の表情がこわばり、コナンに言った。
「新一君・・・。哀君を探しに行ってくれんか？」
「え？」
「今日はその内雪になるそうじゃ。もし夜まで帰らんかったら・・・ワシは不安で不安でたまらないわい。」
「いや・・・だったら博士が探しに行けば・・・。」
「年寄りを雪の中に放り込む気か！？もっと年寄りをいたわらんかい！！」
「わ・・・わかったよ。わかったわかった。」
（いつもは年寄り扱いするなって言ってるくせに・・・。）

ザー　ザー　ザー
コナンが博士と話をしている間に、雨はまた一段と強くなっていた。

（・・・これで、雪なんて降るのかよ・・・。）
ぽつぽつと言う音が、心なしか強くなっている気がする。
とりあえず博士の家を出たコナン。だが、勿論哀の居場所を知るわけがない。
コナンに出来ることは、町中を調べまわることだけであった。
（どこにいるんだよ・・・あいつ・・・暗くなってきたら一層見つ

けにくいってのに・・・。）
コナンの想いとは裏腹に、空はどんどん暗くなり、雨足も一層強まっていった。
「こんなに早く暗くなるなんてな・・・。しゃーねえ・・・。あいつが行きそうな所に行ってみっか。」
博士が言っていた「今日」、それと「お姉ちゃん」をヒントにし、哀の居場所を推理しようと言う試みだった。
灰原の姉、宮野明美が絶命した場所や、その事件に関わっているところにコナンは行った。だが、全く足取りはつかめなかった。
「くそっ！あいつがＤＢバッジを持ってたらすぐに見つかるって言うのに・・・元太の野郎、間違えて二つ持っていきやがって・・・！？」
そうコナンが愚痴を言ったとき、コナンの頭にあの事件の最初のことが蘇ってきた――――。

「では、お嬢さん。名前と年齢をおっしゃってください。」
「広田雅美、１７です・・・。」
「雅美さん、１７なんですか？偶然！私もなんですよ！！」
蘭が声を張り上げて言った。
「誕生日はいつなんですか？」
テンションが上がりっぱなしの蘭を小五郎が止めようとした。
「おい、蘭・・・。依頼と関係ないことを聞くな。雅美さんが困るだろ。」
「あ、探偵さん。私は大丈夫です。・・・蘭さん、でしたね。私の誕生日は、十二月二十四日です。」
クリスマス・イヴじゃないですか！、と蘭が一層声を張り上げて言う。
「いいですね！誕生日がクリスマスイヴなんて。ロマンチックで！」

蘭、と小五郎が止めた。
「お茶を汲んで来い。雅美さんに悪いと思わんのか？」
「だって・・・。・・・わかりました。お父さんの分は抜きでね！」

（そしてその後、オレは蘭に張ろうとした発信機を、誤ってつけてしまったんだ。雅美さんに。いや、明美さんに・・・。そうか。そうだったんだ・・・。・・・これで、全てがつながる！）
コナンはある場所へと一目散にかけて行った・・・。

生嶽寺。
（あいつがいるとしたら・・・ここ以外に無い！）
寺内は暗く、雨もより一層強まってきて、人の影は見えないように思われた。
が、墓石が並んでいる一番奥に、傘も差さずに、墓前の前でしゃがんでいる者の姿が見えた。
（・・・いた！灰原だ！！あの墓は確かお姉さんの・・・。間違いない！）
コナンは傘を閉じて、こっそりと近づいていった。コナンの存在に、あちらは気付いていなかった。ずっと、下をうつむいていたのである。
墓石が見えた。割と新しく、墓には「宮野家乃墓」と彫ってある。
墓前の前でしゃがんでいる者――コナンの推測通り、哀だったのである。
が、コナンが墓石を見れる位置にいると言うのに、哀はコナンに気付かなかった。
眠ってしまっているようである。彼女の瞳から、雫がこぼれた。

涙かはわからない。雨のせいかもしれない。けれど、哀の表情は悲しげであった。
そして、彼女の口は、何度も同じ言葉を発していた。
「お姉ちゃん・・・。・・・お姉ちゃん・・・。」
「・・・・・・。」

ザーッザーッ
雨はとどまるところを知らなかった。
そんな哀を見ながら、コナンはゆっくりと哀に近付いた。哀を起こさないように。
コナンは手に持っていた傘の止め具を音を出さないよう、慎重に外し、傘を開いた。
そして、コナンは傘を哀の頭上に持っていったのである。
「・・・。」
ザーッという雨の音の中に、雨が傘に弾かれる音が混ざる。
その音はどこか悲しげで、今の哀を映し出す鏡のようだった。
「・・・。傘・・・？」
哀が目覚めた。雨が傘に弾かれる音が原因だろう。哀は頭上にある傘を見、驚いて立ち上がり、後ろを振り向いた。
「・・・工藤君・・・。」
「よォ。起きたか。」
哀はかなり驚いた様子で、頭上の傘とコナンの顔を何度も見返して言った。
「・・・どうしてここへ？」
「博士に頼まれてな。・・・心配してんだぜ？」
「・・・。」
哀は聞くと、またコナンに背を向け、墓の方を振り返った。
「どうして・・・ここがわかったの？」
「・・・。わかるさ。・・・今日は、お前のお姉さんの誕生日だもんな・・・。」

哀は振り向かなかった。
コナンは続けた。
「なあ、灰原・・・。気持ちもわかんねーことはないけど、お姉さんは・・・もう、いないんだぜ。・・・だから・・・。」
<B>「私の気持ちなんて誰にもわかりっこないわ!!」</B>
哀の声がコナンの声を掻き消した。
「・・・そうかもしれねーよ。けどよ、お前を心配している奴らの気持ちは、判ってるつもりだぜ。」
「・・・。」
「光彦、博士・・・。みんなお前が変だ、って言ってんだぞ?」
「・・・放っといてよ!」
哀は頭上の傘をはらいながら言った。
「灰原・・・。これだけは聞いてくれ。」
「お姉さんは死んだ。それは二度と変わることのない、真実なんだ。」
「嘘!嘘よ!!お姉ちゃんが死んだなんて・・・!それなら・・・いっそ・・・いっそ・・・!」
「お姉さんが死んだから、お前も死ぬって言うのか?」
<B>「・・・ふざけんなよ!残された者の身にもなってみろよ!!今、お前はそれで苦しんでんじゃねーのかよ!!」</B>
「いいか、灰原。オレがいて、お前がいて、それでみんながいる・・・。だから、今オレとお前はこうしてここにいるんだ。」
「・・・だから、死ぬなんて考えるな。お姉さんの死の悲しみからも、逃げちゃ駄目だ。」
<B>「オレたちはお前を支えているようで・・・本当は、お前に

支えられてるんだから・・・・。」　＜／B＞

「・・・！」

そう言うとコナンは傘を拾い、哀に手渡した。

「風邪、ひくぜ。・・・差してろよ。」

立ち尽くす哀。体が動かないようだ。

「ほら。ったく、心配かけんじゃねーよ。おめー、見た目によらず体弱いからな。」

「あ・・・ありがと・・・・。」

ちらちらと白いものが天空から舞い降りてくる。

「あっ・・・・。」

「おっ・・・・天気予報、当たったみたいだな。」

＜B＞「雪だ・・・・。」　＜／B＞

哀は雪を手にかざし、何やら考え、そしてコナンに言った。

「・・・帰りましょ。」

「気は済んだのか？」

「逃げないよ。・・・あなたが言ったことでしょ？」

「・・・そっか。」

生嶽寺を出て行く二人。

雪の勢いは強く、明日にでも積もりそうなほどであった。

もうすぐ博士宅、と言ったところでコナンがふと足を止めた。

「・・・どうしたの？」

コナンの足取りが止まったので、哀の足も止まった。

「灰原。この雪はいつまで残ると思う？」

「・・・何、いきなり。・・・そうね、除雪されるから、良くて三日かしらね。」

「答えは、ずっとだ。」

「え・・・？」

「オレ、さっき言ったよな。『お姉さんは死んだ』って。『逃げるな』って。」

「でも、お姉さんはお前の側にいつでもいるんだぜ。」

「え・・・？」

＜B＞「お前が忘れない限り、お姉さんはいつまでも側にいるんだ・・・。永遠に、心の中で。」　＜／B＞

「雪は白く、全てを飲み込み、太陽に照らされ、光り輝く。白き光は、心の闇を照らす・・・。光は、途絶えることを知らない・・・。」

「だから灰原。逃げるんじゃねーぞ、運命から。どんなに苦しい時だって、いつだってお姉さんはお前の側にいるんだ。」

「・・・ええ！」

哀の顔に精一杯の笑いの表情が現れた。

これが、精一杯のお礼だと。そして、これからもよろしく、と言う意味を込めて。

「そうしたほうがいいぜ。・・・そうやって、笑ってれば可愛いんだから。」

「・・・え？」

「・・・何でもねーよ。・・・やべっ！もう九時上回ってんじゃねーか！悪リィ灰原、また後でな！」

そう言い残すと哀に背を向け、走り出すコナン。

「ちょっと工藤君！・・・全くもう。」

哀はコナンが見えなくなるのを確認すると、再び笑顔になり、小声で言った。

「ありがとう。嬉しかったよ、あなたの言葉・・・。」

雪は止むことを知らずに降り続ける。
明日は晴れる。そして、雪は永遠に光輝くだろう。
太陽の光を浴びて。心の闇を照らす光となって――――。

（後書き）

後書き

こんにちは（こんばんは）。ＹＯＵ☆ＹＯＵと申します。
さてさて、「永遠の雪光」、どうだったでしょうか？
とりあえず、出来加減としては上出来なのですが・・・まだまだ駄文ですね。自粛します。
宮野家、謎に包まれている部分がこれから判っていくのでしょう。
ちなみに、寺の名前は生獄（しょうがく）寺。
小学館に引っ掛けて作ったわけです＾＾；
「名探偵コナン」、まだまだ絶好調です！連載１，０００回をひっそりと願いながら、私は消えます（苦笑）。またどこかでお逢いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0201a/

永遠の雪光

2010年10月12日08時56分発行